



「絵画文化の発展」より

江戸時代の幕開けから約200年間、太平の世が続いて農業技術の進歩や城下町の整備が進み、持続的な経済成長が実現した。とりわけ京都や大阪など関西の都市では、商人が富を蓄え、それに伴って芸術文化が大きく花開いた。長らく、浮世絵師や町絵師が都市における絵画の発展を担ったが、18世紀後半以降になると、絵画の受容層は、都市に住むあらゆる階層の人々、さらには地方の名士や村の長老層にまで広がった。諸藩の大名や寺院が絵画を注文する機会も増え、そうした需要に応えるため、絵師が数年かけて地方を巡ることも珍しくなかった。絵を楽しむことや買い求めることが、瞬く間に全国的な潮流になったのだ。

18世紀を代表する絵師、円山応挙(1733-1795年)の台頭は、当時、志ある画家たちに新たな道が開かれつつあったことを物語っている。

応挙は、京都郊外の亀岡の農家に生まれ、10代で京都の骨董などを扱う店で奉公して絵画や意匠の才能を発揮し、一点透視図法による眼鏡絵の制作も手がけた。その後、絵の道を極め、多様な技法を学んでいく。狩野派の流れを汲む石田幽汀(1721-1786年)に師事して基本的な画法を身につけ、中国・宋元時代の古画を模写して研鑽を積んだ。応挙という画号は、幽玄かつ写実的な花鳥画で人気を博した元代の画家、銭舜举(1235-1305年)への尊敬の念から付けたものといわれる。

Saunders, Rachel and Yukio Lippit. Excerpts from "Eight: Expansion of Pictorial Culture." In *Painting Edo: Selections from the Feinberg Collection of Edo Art*, 69-70. Cambridge, MA: Harvard Art Museums, 2020. (レイチェル・サンダース、ユキオ・リビット著 『江戸絵画 ファインバーグ・コレクション』「第8章 絵画文化の発展」 p.69-70 ハーバード美術館 2020年)



円山応挙 《狗子五匹図》(部分) ロサンゼルス・カウンティ美術館